

御城だより



首里城基金修理事業 被災した美術工芸品の 修理について

被災した美術工芸品の修理・管理体制等の検討を目的に、令和元年度に第三者委員会「首里城美術工芸品等管理委員会」を設置。

計4回の委員会、及び専門分野のワーキングを開催し、調査・修理・復元に関する提言をもとに、美術工芸品等のオリジナルの価値を損なわないよう、修理を行っています。



『山茶花図』の修理



資料概要

【名 称】^{さざんかす}山茶花図

【製作年代】明代(17世紀)

【本紙の特徴】継ぎの無い1枚の平織絹

【寸法(cm)】修理前:丈160.0、幅50.1 / 修理後:丈160.2、幅50.6

【修理施工者】石川堂

【作 者 名】^{そんてい}孫杖

【本 紙】絹(基底材)

【画 材】顔料、墨、膠

【修理期間】令和5～6年



明代(17世紀)の^{せっぱ}浙派(浙江省画壇)の代表画家である^{そんてい}孫杖の作品です。^{ふっけんは}浙派は福建派と共に琉球絵画に最も近い絵画様式として知られています。一枚絹に水墨技法による岩と写実的な紅白の山茶花が描かれており、「漫士孫杖写」の落款があります。

損傷状態

経年劣化により、本紙には多数の横折れと^{しわ}皺、折山の亀裂が生じていました。裏打ち紙には糊浮きが生じ、表具と料絹にたゆみが生じていました。本紙絵具層の欠失、本紙の亀裂・欠失箇所^{しわ}に補修絹が施されていました。また、本紙肌裏紙には黒色調の補彩が確認されました。

掛物を巻き取る軸木と、その中央部にある鉛が膨張し、表具と本紙を押し当て破損が生じていました。

修理工程



剥落止め



裏打ち紙除去



旧補修絹の除去



補絹作業



肌裏打ち



増裏打ち



折れ伏せ入れ



付け廻し



中裏打ち



総裏打ち

今回の修理作業では、薄い膠溶液を用いて絵具層の割れ・浮き箇所の剥落止めを行い、絵具層の接着と強化を図りました。絵具層が安定した後、本紙を傷めない程度に本紙全体を加湿し、吸水紙に染みと汚れを移し除去しました。旧裏打ち紙、旧補修絹を除去しました。本紙の欠失箇所(※1)には本紙に類似した「電子線劣化絹」を選定し、天然染料の矢車で染色し水酸化カルシウム溶液で後媒を行いました。折れが生じている箇所には伝統的な修理方法である折れ伏せを施しました。

本紙裏面の絵具の調査を行った結果、紅白の山茶花と葉の箇所に裏彩色の痕跡を確認しました。このことにより、中国の伝統的な表現技法である裏彩色が施されていることがわかりました。しかし、過去の解体修理時(※2)に一部除去されており、裏彩色が失われている部分もありました。

※1 欠失箇所の補修…本紙の欠損部には、本紙と同様の素材(絹製であれば絹、紙製であれば紙)を使用しています。

※2 解体修理…本紙の裏には本紙を支えるための裏打ち紙が施されています。古い裏打ち紙を除去し、新しいものに取り替えることを解体修理と言います。



修理後



『琉球焼龍水差』の修理



資料概要

【資料名】りゅうきゅうやきりゅうみずさし琉球焼龍水差

【寸法(cm)】高13.5 / 底径7.0 / 総幅16.0

【製作年代】明治以降

【修理施工者】工房いにしへ

1910年代頃に壺屋で作られた水滴(すいてき:毛筆の書で墨を磨る際に、硯に水を注ぐ文房具)です。当時流行した「古典焼」と呼ばれる様式で、異国情緒を強調する文様や、焼成後に彩色を施す技法などで、県外向けの商品として人気を博しました。しかしその後、壺屋焼の中心理念となった民芸運動の「用の美」と矛盾する様式として、次第に作られなくなり、忘れられました。

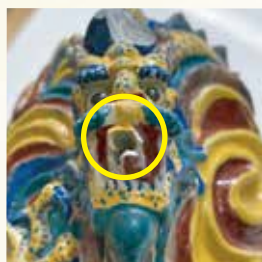
古典焼が見直されるのは1990年代になってからです。本品は古典焼の中でも特に精緻に製作された特注品で、鎌倉芳太郎写真資料に類例作品のモノクロ写真が残され、諸見民芸館(沖縄市)には類似作品1点が現存しています。

損傷状態

水差の注ぎ口の部分が欠損し、龍のたてがみ(頭部)が欠失していました。注ぎ口の破片がわずかに残っていたため、元の位置を特定し修理することにしました。また、たてがみの部分は欠失していましたが、鎌倉資料などから類似資料を参考に復元出来ると判断し、形状復元することにしました。

被災直後

修理工程



スチームクリーナーを用いて破断面の汚れを除去した後、注ぎ口の欠損箇所に破片を接着しました。



注ぎ口とたてがみの欠失部分を復元するめ、パテ状にしたエポキシ樹脂を用いて成形しました。



注ぎ口とたてがみの補填部分の表面をなだらかにするため紙やすりで整えました。



釉薬の厚さに凹凸がある面は顔料を加えたエポキシ樹脂で色と質感を合わせました。注ぎ口の平らな面はアクリルポリウレタン樹脂に顔料を混ぜて色を付けました。



修理前



右側面



左側面

修理後



右側面



左側面





『黒漆雲龍螺鈿盆』の修理



被災直後

損傷状態

火災により貼りついた薄葉紙の紙繊維が盆全体に残っていました。特に見込や鰐の一部は、繊維が強く付着していました。また、薄葉紙が付着していない箇所は内部からにじみ出たと考えられる油滴のような跡が数カ所に見られました。螺鈿の部分に空気の混入が多く見られたため、剥がれ落ちる危険性が考えられました。

また、火災によりにじみ出たと思われる茶色い汚れが、鰐に広く被さっており、螺鈿が茶色く変色したように映っていました。鰐の外側には、弧を描くように10cm程の亀裂がり、艶が失われてマットな質感になっていました。内側には1cm程の亀裂が見られました。縁には一箇所、塗膜の剥落があり木地が露出していました。

他にも、高台の口縁は使用によるものと思われる塗膜の損傷が、一周にわたって見られました。

修理工程



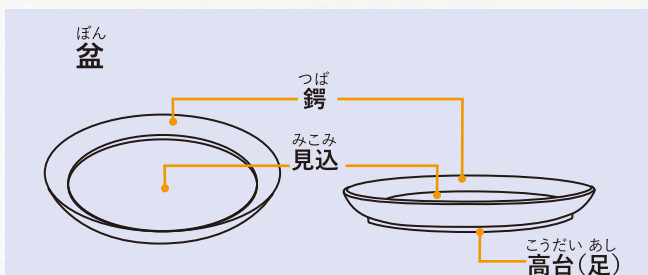
クリーニング 精製水で湿らせた綿布を使用して、薄葉紙が付着した跡に残る紙繊維を除去しました。作品の表面に付着しているシミに精製水やエタノール水溶を用いてクリーニングを試みましたが、効果が見られなかったため、油脂の除去に効果がある弱アルカリ性の重曹水を使用したところシミの除去に一定の効果が見られました。

重曹水でクリーニングを行う際は、汚れの物質と混合することで生まれる物質を資料表面に残留させないため、重曹水を用いた後に精製水での十分な拭き取りを行いました。

資料概要

【名称】黒漆雲龍螺鈿盆 くろうるしうんりゅうらでんぼん 【修理施工者】琉球漆工藝舎
【製作年代】18世紀 【修理期間】令和4～6年
【寸法(cm)】高さ4.1 / 径34.9

黒漆塗の湾曲した鰐をもつ円形の大盆で低い高台を付しています。17世紀から18世紀にかけて中国への進貢品として盛んに制作された様式の盆です。見込み部分には火焰宝珠を中心に五つの爪を持つ双龍と雲を、鰐には亀甲花菱文と吉祥文をそれぞれ螺鈿で表しています。



【吉祥文】縁起が良いとされている文様。この作品には、羽根扇、団扇、払子、宝巻の四種が鰐に描かれている。

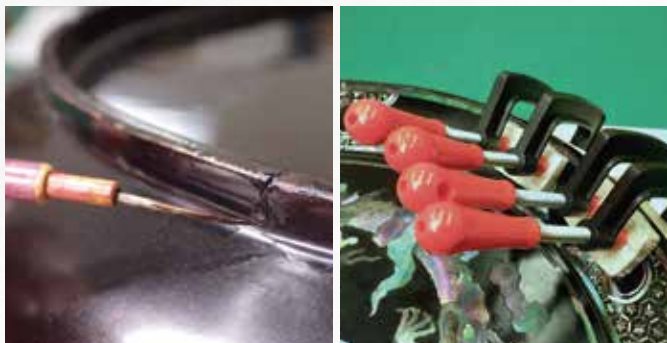
【五爪の龍文】中国皇帝のシンボルとして表される。

【螺鈿】夜光貝やアワビ貝を薄く加工し、文様に切り抜き、装飾する技法。

膠液含侵

螺鈿は所々に気泡が見られ、部分的に貝の浮きが生じているため、膠液での接着を試みました。貝は、気泡の周辺が塗膜と密着していたため膠液が入り込める隙間が無く、螺鈿の押さえは、含侵が可能な部分のみに留めました。





むぎうるしがんしん 麦漆含浸

高台の木地接合部分に生じる亀裂とその周辺塗膜の浮きを押さえるため、下地が露出している部分に前処置として生漆を染み込ませ、補強しました。漆が硬化する間に、各修理部分の形状に合わせて木型を作り、アクリル板や塩化ビニルシートを合わせた治具を作成しました。接着は、亀裂部分に接着用に調合した麦漆を溶剤で希釈して、複数回に分けて流し込み、溶剤が揮発して、麦漆に粘度が出てきたことを確認したのちクランプによる押さえを行いました。



こくそじゅうてん 刻苧充填

生地亀裂の接合部や塗膜欠損部に、刻苧を充填し形状を調整しました。刻苧は、粒子の異なるものを適宜複数回に分けて使用しました。



下地付け

生地亀裂の接合部や塗膜欠損部に、充填した刻苧が十分に固まった後、下地を施しました。下地表面を砥石で水研ぎした面に漆固めを行い、色艶を整えました。



とまく 塗膜強化

裏面は塗膜を強化するために摺漆を施しました。溶剤で希釈した生漆を塗膜に塗布し、表面に余分な漆が残らないよう丁寧に拭き取りました。



見込み 繊維付着



つば
鍔部木地亀裂



鍔裏 クリーニング



修理後

『黒漆牡丹七宝繫沈金食籠』の修理

資料概要

【名称】黒漆牡丹七宝繫沈金食籠（沖縄県指定文化財）

【製作年代】16～17世紀

【寸法（cm）】高さ38.9 / 径34.2

【修理施工者】目白漆芸文化財研究所

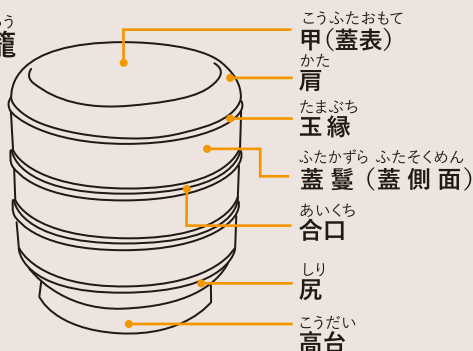
【修理期間】令和3～6年

木製円形、印籠蓋造り、二段重ねの食籠です。甲面が一段高く、甲盛を設けています。肩や尻にやや丸みを取り、高台を付し、外側は黒漆が塗られています。甲面には牡丹を描き、地文として七宝繫ぎ文様が隙間なく埋め尽くされています。

肩、蓋鬘、各側面、尻、高台側面には甲面同様の牡丹文様、各段の縁には界線、高台下部には界線と山形波を廻らし、それぞれを沈金で表しています。蓋および身上下段の内側は朱漆塗り、身上段の底裏面は黒漆が塗られています。蓋鬘と各段合口部分は玉縁を廻らし、金箔を施しています。

被災直後

じきろう
食籠



【食籠】食物を盛る容器。儀礼の際に御花（みはな、添え物の米）を入れる祭祀道具としても使われた。

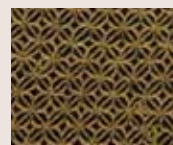
【牡丹文】漆工、木彫、金工、染織、陶磁器などにも使用される。中国では牡丹の花の形が豊満で色彩が華麗であることから、富貴の象徴とされた。

【七宝繫文】円形を繋いだ文様。繁栄、ご縁などの意味がある。

【沈金】漆の塗膜面に刀物（沈金刀）で文様を彫り込んだ部分に金箔を埋めて模様を表す技法。



牡丹文



七宝繫文

損傷状態

全体に経年による漆塗膜の劣化や亀裂、剥離が生じていました。一部は沈金線の彫りに沿って亀裂、剥離が見られました。漆塗膜表面にカビや汚れの付着、火災により貼りついた薄葉紙の紙繊維が残存していました。漆塗膜の欠損で塗膜の下に施されていた下地が露出している箇所がいくつか見られました。高台の畳付は損傷が見られ、部分的に木地まで露出し、巻胎木地の接合面が剥離したことにより隙間が生じていました。

うすようし
【薄葉紙】

作品を保管するために包む紙。

けんたい
【巻胎】

薄いテープ状にした木材を巻いて形を作る方法。

修理工程



【仮止め】クリーニング作業前に剥落の恐れがある箇所には、小さく短冊状に切った雁皮紙を貼り、仮止めを行いました。

【クリーニング】仮止めの後、塗膜表面の埃などを毛先の柔らかい筆で払い落とし、精製水やエタノール水溶液を適宜使用し、数回に分けて少しずつ汚れを取り除きました。

【塗膜押え】漆塗膜が脆弱な箇所は塗膜押えを行い、塗膜の安定確認後クリーニングを実施しました。



むぎうるし
【麦漆含侵】

木地接合部分に亀裂が生じている箇所や下地が露出している損傷箇所には、溶剤で希釈した麦漆を浸み込ませ、木地構造および損傷箇所の接着と補強を行いました。損傷の状態に応じて、麦漆の希釈濃度や含侵回数を適宜調整して行いました。その後、余分な麦漆が塗膜表面に残らないよう丁寧に拭き取り、硬化させました。

むぎうるし
【麦漆】生漆と水練りした小麦粉を混ぜ合わせたもの。



塗膜押え(膠) 漆塗膜が剥離した箇所は、膠による接着を行いました。損傷箇所の状態に応じて膠の接着力を適宜調整し、筆を用いて数回に分けて含侵した後、塗膜表面に残った余分な膠は綿棒等で吸い取りました。その後、押さえたい塗膜の上にシートを載せて、シートの上から竹ひごで抑える心張り法で塗膜を圧着しました。



塗膜押え(漆) 膠による塗膜押さえを行った後、さらに漆による接着を行い安定させました。接着は、溶剤で濃度を調整した麦漆を使用しています。塗膜の状態に応じて、麦漆の希釈濃度を適宜調整し、数回に分けて含侵を行いました。その後、余分な麦漆が表面に残らないよう丁寧に拭き取り、心張り法やクランプを用いて剥離箇所を圧着安定させました。



こくそじゅうてん 刻苧充填

亀裂が生じている箇所および木地や下地が露出している箇所には、刻苧を埋めて処置を行いました。損傷の状態に応じ、刻苧に混合する木粉の粒子を適宜変えています。埋めた

刻苧が硬化した後、砥石等を用いて刻苧の形状を整えました。刻苧充填、形状調整の作業を数回行い、刻苧が適切な高さまで充填できたことを確認した後、刻苧表面の漆固めを行いました。

【刻苧】 麦漆に麻の繊維や木粉を混ぜ合わせたもの。



下地付け

刻苧を埋めた箇所や亀裂部分、塗膜が欠損した箇所には、漆下地を施す下地付けを行いました。下地付けは、損傷箇所の状態に応じて混合する地の粉の粒子を適宜変えて下地付けを行い、硬化後、砥石等で下地表面の形状を整えました。下地付け、表面調整の作業を数回行い、下地表面の漆固めを行いました。

【下地】 漆に地の粉を混ぜ合わせたもの。



際処置

亀裂や処置を施した箇所の塗膜際は、僅かながら塗膜の厚み分の段差が生じており、触手等で塗膜が剥落する恐れがあるため、剥落を防止し、安全に取り扱いができるよう、塗膜際の処置として錆漆を施す錆付けを行いました。

【錆漆】 漆に地の粉より細かい砥の粉を混ぜ合わせたもの。



漆固め

経年や火災による劣化、使用により摩滅した漆塗膜の補強を目的として漆固めを行いました。その後、漆塗膜表面や沈金部分に漆が残らないよう拭き取り、硬化させました。なお沈金部分は、漆が残ると黒くなってしまうため、丁寧に拭き取りを行いました。



高台 木地亀裂



高台 損傷箇所



合口 クリーニング



修理後

※高台損傷箇所は16世紀～17世紀の内部構造を確認できるため、下地等を充填しない保存処置を施しました。

首里城基金

未来へ残そう沖縄の心

貴重な美術工芸品等の 収集・復元・保存・人材育成に向けて

首里城は沖縄の歴史文化を象徴する貴重な文化遺産でしたが、沖縄戦において、多くの文化遺産が灰塵に帰したり、国内外に散逸してしまいました。

約450年にわたる琉球王国の王府としての首里城復元は、県民の長年の悲願でありました。

首里城の建物については、国、県及び関係者のご尽力により本土復帰記念20年事業として1992年11月に47年ぶりに復元され、首里城公園として一部開園し、2019年2月には全面開園されました。



一方、展示物については、国内外に散逸した首里城関係の文化遺産を収集し、復元し、首里城等で一般公開していくため、県、市町村、各種団体、また多くの方からの協力を得て、首里城基金が財団に設置され、これまで文化遺産収集事業を続けてまいりました。

しかし、2019年10月31日、首里城は火災で焼失し、貴重な美術工芸品も391点が焼失しました。

首里城の再建に向けた動きが加速するなか、偉大な先人たちが残してくれた貴重な美術工芸品等の遺産を収集・復元・保存し、首里城で展示できるよう、首里城基金の造成に皆様方の絶大なるご支援、ご協力賜りますよう、心からお願い申し上げます。



首里城基金の仕組み

首里城基金は、首里城での文化遺産収集事業に役立てられています。

基金への寄付金等

基金の運用益

文化遺産収集事業
首里城に関する資料収集

収集 国内外に散逸した文化遺産を収集します。

復元 破損または消失した遺産を復元します。

保存 次の世代のために文化遺産を保存します。

育成 修理・復元・保存に必要な人材育成をします。

展示・一般公開

首里城
公園HP



ON
THE
TRIP

